

3 ^{けんほんちやくしよくよしのまんだらず} 絹本着色吉野曼荼羅図 1幅 [有形文化財（絵画）]

[所在地] 吉野郡吉野町吉野山 2498 番地

[所有者] 金峯山寺

[法量] 縦 138.5 cm 横 39.8 cm

[時代] 鎌倉時代

[概要]

横幅 1 尺余りに対し縦 4 尺を超える、きわめて縦長の吉野曼荼羅図である。

画面上方左寄りに蔵王権現^{ぞおうごんげん}を描き、その上方の大峰の山岳中に八大童子、蔵王権現の足元に役行者^{えんのぎょうじゅ}と前鬼・後鬼、その下方に吉野の神々を左右対称に配置する。神々は、上段左から牛頭天王^{ごずてんのう}と女神像、その下に老若に描き分けた東帯の男神像^{そくたい}、その下にそれぞれ若宮をとまなう勝手明神^{かってみようじん}と子守明神^{こもりみようじん}、最下段に東帯の男神像と武官姿の男神像を表す。

蔵王権現は通有の図像ながら、躍動的な姿を肥瘦線を用いて描き、蔵王権現の青黒色の肉身部には裏彩色を用いた丹念な技法が認められる。各神は表情の細部まで描き込み、均質な線と打ち込みのある線を使い分けて体軀を描く。衣部には暈取り^{くまど}で立体感を表すほか、金泥^{きんでい}や彩色による衣の文様や屋形後壁の画中画も緻密である。

蔵王権現をやや左寄りに配置し童子の一人と相對する背景には何らかの説話の存在が想定される。また、画面下段の吉野の神々が、円光を背負って迦葉座^{かしよう}に坐す二神、屋形に収まる四神、牀座に坐す二神に描き分けられる点は、吉野曼荼羅の遺品中でも他に例がない。

作例の少ない吉野曼荼羅図の中でも、本図は鎌倉時代の西大寺本（重文）に次ぐ作と考えられ、図像的にも特異な遺品として高い価値を有する。

